

大学生柔道選手におけるライフスキル獲得が キャリア成熟に及ぼす影響

山本 浩二¹⁾ 島本 好平²⁾

Koji Yamamoto¹ and Kohei Shimamoto²: Acquisition of life skills and its influence on the career maturity of university student judo players. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: In order to provide effective career education support for university athletes, it is necessary to accumulate fundamental knowledge about their acquisition of life skills. Therefore, the purpose of this study was to examine the influence of life skills on career maturity as a judo player in university student judo players.

In June 2016, a survey of 510 university judo players (male: 408, female: 102, mean age: 19.70 ± 1.28 years, mean period of experience: 12.37 ± 5.70 years) was conducted using the Appraisal Scale of Required Life Skills for College Student Athletes (Shimamoto et al., 2013). This scale evaluates the life skills required by athletes using 10 dimensions (stress management, setting goals, thinking carefully, appreciating others, communicating, maintaining etiquette and manners, always making one's best effort, taking responsibility for one's own behavior, being humble, and maintaining physical health and well-being). In addition, the Life Career Maturity Scale (Sakayanagi, 1999) was used to evaluate the students' life career interest, autonomy, and planning ability. An analysis focusing on the students' sex and the presence or absence of experienced registration of certified athletes in the All Japan Judo Federation was also conducted.

First, factor analysis was conducted to classify the life skills into 4 aspects "self-control skills", "goal achievement skills", "communication skills", and "problem solving skills" and it was shown that reliability and validity were generally satisfactory.

Next, the influence of life skills on the 4 aspects on career maturity was examined by structural equation modeling. This showed that goal achievement skills had a significant positive influence on both male and female career maturity. Similarly, self-control skills and goal achievement skills had a significant positive influence on career maturity in common with the presence or absence of having been registered as a certified athlete in the All Japan Judo Federation. Based on the above results, it was suggested that acquisition of self-control skills and goal achievement skills is necessary to raise the level of career maturity in university student judo players.

Therefore, it is considered important to offer educational support for university student judo players using acquisition of both these skills.

Key words : judo, university athletes, dual career, educational support, career formation

キーワード : 柔道, 大学生アスリート, デュアルキャリア, 教育支援, キャリア形成

I 問題と目的

所属する大学において高度なレベルで競技を行う「大学生アスリート」（以下「学生アスリート」と略す）は、試合での勝利や自己の記録を達成す

るために、チームメイトや指導者との適切なコミュニケーションを図りながら、日々の厳しい練習やトレーニングに取り組んでおり、そのような稀有な経験を通じて得られた技術や知識を社会に還元することが求められるといえる。しかしながら、一部のアスリートは、社会生活におけるさまざま

1) 神戸医療福祉大学社会福祉学部
〒 679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡 1966-5

2) 明星大学教育学部
〒 191-8506 東京都日野市程久保 2-1-1
連絡先 山本浩二

1. Kobe University of Welfare, Faculty of Social Welfare
1966-5, Takaoka, Fukusaki, Kanzaki, Hyogo, 679-2217

2. Meisei University, Department of Education
2-1-1, Hodokubo, Hino, Tokyo, 191-8506

Corresponding author kyamamoto@sw.kinwu.ac.jp

な選択肢の中で競技を最優先し、そのことへの高い自己投入によって、ときには家族やチームメイトによるサポート等を見捨て犠牲にしていることが危惧されている（豊田・中込, 1996）。そして、このようなことが競技引退後の社会生活に対する深刻な不適応につながるものが少なくない（豊田・中込, 2000）と言われ、事実、一部のアスリートや元選手による暴力行為や賭博等の問題行動が顕在化^{注1}している（日本経済新聞, online2）。2020年東京オリンピック・パラリンピック開催機運が高まる中、これらの問題は、スポーツの価値を低下させるとともに、アスリートがその経験を通じて学んだ技術や知識を社会に還元することの妨げになることが懸念される。

ここで特に学生アスリートに着目すると、これまでに大学生活への適応や卒業後の進路選択を含めた競技引退後のキャリアに関わる問題が複数の研究によって指摘されている。大江（2003）はスポーツ推薦等の推薦入試制度を利用して大学に入学した一部の学生に学業不振がみられることを指摘している。また、友添（2006）は、大学と企業が連携しながら支えてきた日本型トップアスリート養成システムの崩壊による就職先の減少を問題視していることから、スポーツ推薦制度等を利用して大量に大学に入学した学生アスリートの卒業後における就職先の確保は厳しくなることが予想される。さらに、清水・島本（2011）は高度なレベルで競技に取り組む大学生トップアスリートが、日々のトレーニングや試合、遠征等による時間の制約等で学業や就職活動に支障をきたし、競技引退後のキャリアをスムーズに獲得することが困難になることを指摘しており、社会生活への不適応を起こす可能性があると考えられる。これらのことから、大学側は学生アスリートの競技生活を含めた大学生活を充実させることに加え、競技引退後の就職等のライフイベントへの対処、そして、その後の長期にわたる人生をより充実させるための教育支援を大学在学中に実施していく必要があるといえる。

このような中、日本スポーツ振興センター（Japan Sport Council：以下「JSC」と略す, 2014）

は、文部科学省が2012年に策定した「スポーツ振興計画」に基づき、アスリートライフに必要な環境を確保しながら、現役引退後のキャリアに必要な教育や職業訓練によって将来に備える「デュアルキャリア」に関する意識啓発を行うなどしている。ここでいう「キャリア」とは、日常的に使用されるような職業に関連する道のりを意味するだけではなく、個人の人生や生涯という広範な意味を持っていると解釈される（JSC, 2014）。そして、デュアルキャリアは「長い人生の一部である競技生活の始まりから終わりまでを、学業や仕事、その他人生のそれぞれの段階で占める重要な出来事やそれに伴う欲求とうまく組み合わせていくことである」（European commission, 2012）と定義されており、アスリートにとっては個人の人生というキャリアの中に、「アスリートとしてのキャリア」が含まれ、キャリアの二重性がある状態と考えられている。そのデュアルキャリアの取り組みによって得られる有益性として、人格形成や自己開発、自己実現の促進などが挙げられている（JSC, 2014）。また、このデュアルキャリア施策推進に向けた教育支援のあり方については、諸外国の事例等を踏まえ、わが国の学生アスリートに関して学業期と重なることによる教育へのアクセスの制限や社会性の欠如等の課題を参考に検討されている。そして、競技引退後のキャリアを見据えて現役中からアスリートの教育支援を充実させようとする試みがなされている。そのような取り組みの中で、近年では「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）や、「人々が現在の生活を自ら統制し、将来のライフイベント（人生における重大な出来事）をうまく乗り切るために必要な能力」（Danish et al., 1992）等と定義されるライフスキル（以下「LS：Life Skills」と略す）という心理社会的能力を示す概念を変数とした研究・実践が行われている。

このLSは、Danish et al.（1995）によって提唱された、Life Development Interventions モデルと呼ばれるアスリートの生涯発達を促すモデルの中心的な概念として位置づけられている。その構成

要素は、ある目標を設定し、達成するために計画を立てる「目標設定スキル」や、ストレス源を知り、ストレスのレベルをコントロールする「ストレスマネジメントスキル」等が中核をなすスキルとして挙げられ、これまでも児童・生徒の飲酒や喫煙、薬物乱用等の問題行動を防止するための健康教育の中でLSの獲得を重視した教育が実施されてきた（WHO, 1997）. わが国においても、LSは21世紀における教育の基本目標でその育成が強調されている「生きる力」に極めて類似した概念であるとされ、児童・生徒を対象とした道德教育等で実施されている（川畑, 1997）. また、体育・スポーツ心理学領域では、このLSを変数とした研究・実践が活発に展開されている. 例えば、大学体育実技や運動部活動などのスポーツ経験がLS獲得に正の影響を及ぼすことが報告されている（島本・石井, 2007；島本・石井, 2010）. また、LS獲得を目的として、運動・スポーツ活動を通じたLS教育プログラム（以下「LSP」と略す）の開発・実践が各種目において行われるなど（例えば、ラグビー：東海林・堀越, 2011；サッカー：上野, 2005）, 研究成果が蓄積されつつある. さらに、試合での勝利や自己の記録達成に向けて日々厳しいトレーニングに取り組むアスリートを対象とした幅広い教育支援を実現するために、アスリートのためのLSP研究会の発足やスタート教材が開発されている. 例えば、島本ほか（2013）はアスリートに求められるLSを、「目標設定」「コミュニケーション」「ストレスマネジメント」「体調管理」「最善の努力」「礼儀・マナー」「責任ある行動」「考える力」「謙虚な心」「感謝する心」の10側面から構成されることを明らかにし、それらを評価する尺度を開発した. また、その評価尺度を用いて、個人種目を実施するアスリートのLSと競技成績との関連を検討し、両変数間に正の関連がみられることを明らかにするなど（柔道：山本ほか, in press；ゴルフ：島本・米川, 2014；レスリング：清水・島本, 2012）, 効果的な教育支援の実現に向けた基礎研究が展開されている. これらの研究成果は、競技場面の行動だけでなく、それ以外の生活場面にお

ける行動が競技成績や競技能力を左右するという従来の知見（長谷部, 2011）を支持するものであり、アスリートが競技生活を通じてLSを獲得することは、アスリートとしての競技生活を充実させるために意義があると考えられる.

前述のように、LS獲得は学生アスリートの問題行動の防止や上位の競技成績達成に加え、キャリア獲得に関する課題を解決するために必要であると考えられており、近年の研究において、清水・島本（2011）やShimizu et al.（2015）は、LSの各側面が競技引退後のキャリア獲得を促進することを示唆している. また、福井ほか（2016）は、教育系大学における学生アスリートのライフイベントである教員採用試験に焦点を当て、その試験結果とLSとの関連性を島本ほか（2013）の尺度を用いて検討した結果、「考える力」や「体調管理」「責任ある行動」において2次試験合格群の方が1次不合格群よりも有意に高い値を示したことを報告している. これらの結果は、LSが学生アスリートの大学在学中および卒業後のキャリア獲得に正に影響している可能性を示唆している. また、先述のDanish et al.（1992）のLSの定義に鑑みると、学生アスリートの場合、競技引退後（大学卒業後）のキャリア獲得は直近のライフイベントであり、それに効果的に対処していくためにも大学在学中にLSを獲得しておくことが必要であると考えられる. さらに、福井ほか（2017）はLSとキャリア獲得の両変数間に、自己のこれからの人生や生き方について成熟した考え方を示す「キャリア成熟」が媒介変数として存在し、LSはキャリア成熟にも正に影響するという仮説モデルを立てている. そのキャリア成熟自体は「知見の広い、年齢にふさわしいキャリア決定をするための個人のレジリエンス」（King, 1989）等と定義されている. また、先述のように、キャリアが「人生・生涯」を含むより包括的な概念になっていることを踏まえ、坂柳（1999）は、主に人生や生き方に対する考え方を評価することができる「人生キャリア成熟尺度」を開発した. 開発された尺度は、自己のキャリアに対して積極的な関心を持っているかどうかに関する「キャリア関心性」（以下「関心性」と略す）、

自己のキャリアに対して主体的であるかどうかに関する「キャリア自律性」（以下「自律性」と略す）、自己のキャリアに対して将来展望を持ち計画的であるかどうかに関する「キャリア計画性」（以下「計画性」と略す）から構成されている。福井ほか（2017）は、島本ほか（2013）ならびに坂柳（1999）の尺度を用いて、学生アスリートを対象に上述したLSとキャリア獲得の間にキャリア成熟が媒介するという仮説モデルを検証した。その結果、大学生男女においてLSの「考える力」や「ストレスマネジメント」等の6側面が人生キャリア成熟尺度の「自律性」を媒介してライフイベントへの対処に正の影響を及ぼしたことを明らかにしている。また、LSとキャリア成熟の関係性については、さまざまな種目の選手を対象に検討されている。例えば、山本ほか（2016）は大学生柔道選手を対象としてLSの「体調管理」や「考える力」、「感謝する心」が人生キャリア成熟の各側面に正の影響を与えたことを報告した。これらの研究は、学生アスリートのLS獲得がキャリア成熟へ正に影響することを示唆するものであり、LSの獲得レベルを高めることによって、今後の人生や生き方に対する考え方を充実させ、キャリア獲得を促進する可能性があると考えられる。また、坂柳（1990）はキャリアの発達を「進路選択と進路適応を含む生涯にわたる連続的過程である」と指摘していることから、学生アスリートのライフイベントである職業選択や、その後の職業生活を包括的に捉えた長期にわたる人生に対する考え方について検討する必要があるといえる。一連のDanish et al.（1992, 1995）の研究に鑑みれば、LSはさまざまなライフイベントに上手く対処していきながら、自らが望む人生を実現していくために必要なスキルであると推察される。そのため、今後も学生アスリートのキャリア獲得、そして競技引退後の長期にわたる人生を充実させるために研究成果の蓄積が求められているといえよう。また、アスリートのキャリア獲得・形成過程は、競技・種別や競技レベル、年齢、性別等によって多様であり、個々のアスリートによって異なることが指摘されている（JSC, 2014）。そのため、学生

アスリートの競技生活を充実させるLSの獲得状況やLSとキャリア獲得を媒介するキャリア成熟のレベル、そして両変数間の関係性については、性別や競技レベルの高低といった個人の属性に基づいた検討を行い把握することが、教育支援を効果的に展開するために必要であると考えられる。しかし、個人の属性に基づいて両変数間の関係性を検討した先行研究は未だ少なく、さまざまな競技種目を実施している学生アスリートに対する教育支援を今後充実させていくためには、多様な種目に焦点を当て研究成果を蓄積することが求められよう。

そこで本研究では、学生アスリートを対象に性別や競技レベルという個人の属性から、LS獲得とキャリア成熟について検討することにより、効果的な教育支援のための基礎的知見を抽出することを目的とする。具体的には、まず学生アスリートの性別や競技レベルの違いによって、LSおよび人生キャリア成熟のレベルに違いがみられるかどうかについて検討する。次に、LSが人生キャリア成熟に及ぼす影響を、福井ほか（2017）の因果モデル（図1）をもとに検討する。なお、近年において、「キャリア」は個人の「人生・生涯」を指す包括的な概念や用語として用いられている（JSC, 2014）。また、デュアルキャリア施策においても、アスリートに関しては、キャリアの二重性（個人の長い生涯としてのキャリアと、アスリートとしてのキャリア）が指摘されている。そこで本研究のLSについては、包括的な人生としてのキャリアの中の、アスリートとしてのキャリアを充実させるものとして捉え論じることとする。

また、清水ほか（2010）は、効果的な教育支援のためには学生アスリートが控える就職や進学というライフイベントへ向けた具体的な解決策を検討しなければならないとし、特定の競技種目を対象にすることを推奨している。そこで、本研究ではリオデジャネイロオリンピックにおいて男女3階級で金メダルを獲得し、2020年の東京オリンピックにおいてもメダルの獲得がこれまで以上に期待される「柔道」に着目する。また、リオデジャネイロ大会では14名の日本代表選手の内、大

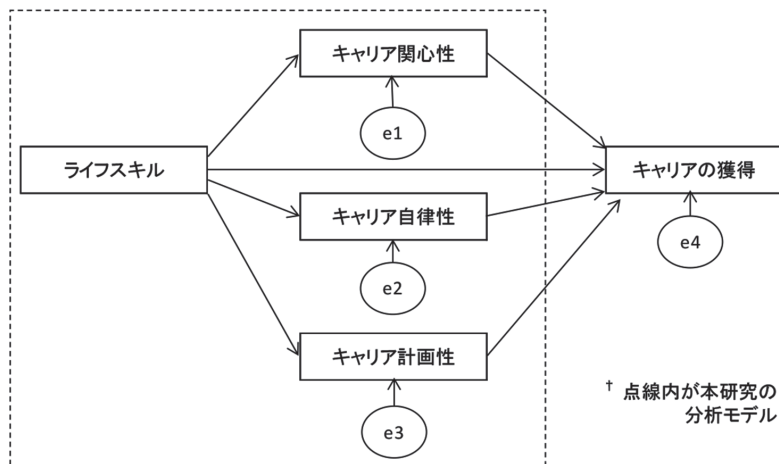


図1 福井ほか（2017）の研究モデルをもとにした本研究の分析モデル

学を卒業し実業団等で活動する選手が9名、現役大学生が2名選出されており、大学運動部での強化が国際的な競技力向上に大きな役割を果たしていると考えられる。その一方で、大学生柔道選手の一部において暴力問題等の問題行動がマスコミに取り上げられている（栗野，2016）。このような反社会的行動を防止していくために、大学在学中における教育支援が必要であると考えられることから、大学でスポーツ活動を実施する選手を競技と教育の両側面から支援していくため、大学生柔道選手を調査対象者とする。

II 研究方法

1. 調査対象者および調査時期

調査対象者は、関東や関西地区に所在する9大学に所属している柔道選手570名を対象とし、その内、調査に不備なく回答した510名（男子：408名、女子：102名、全日本柔道強化指定選手経験有（以下「強化経験有群」と略す）：80名、同じく経験無（以下「強化経験無群」と略す）：430名、平均年齢：19.70 ± 1.28歳、競技経験平均年数：12.37 ± 5.70年）を分析の対象とした（有効回答率89.5%）。この調査対象者は、全日本学生柔道優勝大会および全日本学生柔道体重別選手権大会（以下「インカレ」と略す）での優勝や入賞を目標として競技に取り組んでいることを、当

該対象者の所属する各大学の監督およびコーチに確認している。また、調査対象の9大学の内、7大学に強化経験有群が在籍している（A大学：8名、B大学：9名、C大学：29名、D大学：11名、E大学：8名、F大学：7名、G大学：8名）。さらに、調査対象の9大学の内、8大学において男子選手と女子選手の指導を異なる指導者がそれぞれ行っていた。調査時期は、2016年の5月中旬から6月中旬であった。

2. 調査内容

2.1 フェイスシート

フェイスシートでは、年齢や性別、競技経験年数、強化選手登録経験の有無について回答を求めた。

2.2 大学生アスリート用ライフスキル評価尺度

島本ほか（2013）が、日本一を達成する等の優秀な競技成績を残した指導者の実践的な経験をもとに開発した尺度である。アスリートに求められるLSを、「目標設定（項目例：目標は考えるだけでなく、紙に書き込むようにしている）」、「コミュニケーション（項目例：チームのメンバーの前では、本当の自分を表現することができている）」、「ストレスマネジメント（項目例：悩み事を1人で解決できない時には、誰かに相談するようにしている）」、「体調管理（項目例：食事は自

分に必要な栄養素を考えながら摂取している)」、
「最善の努力(項目例:なかなか周囲に認められなくても、辛抱強く努力するようにしている)」、
「礼儀・マナー(項目例:試合中に悪質なヤジを飛ばすようなことはしない)」、「責任ある行動(項目例:同じような失敗は2度繰り返さないようにしている)」、「考える力(項目例:あれこれと指示を受けなくても、次にどうすればよいか考えることができる)」、「謙虚な心(項目例:たとえほめられたとしても、いつまでもその事で浮かれることはない)」、「感謝する心(項目例:お礼の言葉は、はっきりと声に出して伝えている)」の10側面(各側面4項目、計40項目)から評価することができる(表1)。項目の評定は、「4:とても当てはまる」、「3:まあまあ当てはまる」、「2:あまり当てはまらない」、「1:全然当てはまらない」の4段階の自己評定で行い、分析の際には選択肢の数値をそのまま得点化し、評定値が高いほどスキルの獲得レベルが高いと解釈される。教示文は「競技場面を含めた日々の生活全体における様子についてお聞きします。以下の各々の項目について、現在の自分に最も当てはまる選択肢の数字1つに丸印を付けて下さい」とし、調査対象者の競技場면을主に想定した日常生活全般における現時点での様子について回答を求めた。また、逆転項目の評定値は当該下位尺度得点算出の際に反転処理された。

なお、「責任ある行動」については、その項目内容から「同じような失敗を2度繰り返さないようにしている」や「失敗をした時には、すぐにその分を取り返そうと努力する」など、自らが失敗をした際に起こす行動や態度と捉えることができることから、以後の分析では「個人の失敗事態に対する挽回行動」(以下「挽回行動」と略す)と読み替えて解釈することにした。

2.3 人生キャリア成熟尺度

坂柳(1999)が先述のキャリア成熟の定義を踏まえ、キャリアを人生や生涯という視点から捉え開発した尺度である。本尺度は、人生や生き方に対する考え方と捉えた人生キャリア成熟のレベル

を、自らの人生キャリアに対して積極的な関心を持っているかどうかを示す「関心性(項目例:これからの人生を、より充実したものにしたいと強く思う)」、自らの人生キャリアへの取り組み方が自律的であるかどうかを示す「自律性(項目例:自分から進んで、どんな人生を送っていくのか決めている)」、自らの人生キャリアに対して将来展望を持ち計画的であるかどうかを示す「計画性(項目例:これからの人生や生き方について、自分なりの見通しをもっている)」の3側面から評価することができる(各側面9項目、計27項目)。項目の評定は、「5:とても当てはまる」、「4:まあまあ当てはまる」、「3:どちらともいえない」、「2:あまり当てはまらない」、「1:全然当てはまらない」の5段階の自己評定で行い、分析の際には選択肢の数値をそのまま得点化し、評定値が高いほどキャリア成熟のレベルが高いと解釈される。教示文は「あなたの将来に関する展望についてお聞きします。以下の各々の項目について、現在の自分に最も当てはまる選択肢の数字1つに丸印を付けて下さい」とし、現時点における人生や生き方に対する考え方について回答を求めた。なお、逆転項目の評定値は当該下位尺度得点算出の際に反転処理された。

3. 手続き

調査は、各大学柔道部の部長・監督やコーチに対して、調査の主旨および調査対象者への倫理的配慮について本研究者が直接説明し、調査実施の許可を得た上で郵送法により実施された。倫理的配慮の具体的内容については、「調査は無記名式であること」や「調査への協力は強制ではなく任意であること」、そして「回答の内容により、当該部内の競技者としての評価に影響が及ぶことはない」というものであった。また、調査票冒頭には、「調査結果はすべて統計的に処理され、個人を特定するものではない」ことや「調査への協力は任意である」ことなどの教示文の内容を調査対象者に直接示すことに加え、調査実施者から口頭で教示文の内容を伝えてもらった。調査の実施や回収および返送作業は各チームの監督およびコー

ちによって行われた。

4. 統計処理

JSC (2014) の指摘に基づけば、アスリートとしてのキャリア獲得・形成過程は、柔道選手に関しても性別や競技レベルによって異なることが予想される。特に、本研究において問題としている全日本強化合宿への参加の有無は、競技レベルの違いを表す指標としては明確であり、この有無の違いが LS 獲得の状況に影響を及ぼすことは十分に考えられることである。また、調査対象者の所属する 9 大学の内の 8 大学は、男女で指導者が異なるという指導の実態を踏まえると、性別ごとの分析結果を検討し、基礎的知見を見出す意義はあると考えられる。そこで、柔道選手のキャリア獲得・形成過程に関する基礎的知見の収集を目的とし、性別と強化経験の有無を視点とする検討を実施する。

分析ではまず、大学生柔道選手における LS の獲得状況やキャリア成熟のレベルの性差や強化経験の有無による差を検討するために対応の無い t 検定を実施した。次に、大学生柔道選手を対象とした場合、LS の 10 側面はどのように分類されるかを検討するために、LS10 側面の各下位尺度得点をもとに、探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を実施し、因子負荷量が .40 以上であることや固有値の減衰状況、解釈可能性を基準に高次の側面の分類を試みた。この一連の因子分析を実施する理由は、分析結果の解釈を容易にすることと分析の際に発生する可能性がある多重共線性を解消するためである。その後、分類された側面の信頼性と妥当性については、内的一貫性や確認的因子分析によるモデルの適合度をもとに確認した。さらに、因子分析により見出された高次の LS 獲得レベルを、大学生柔道選手における属性（性別・強化経験）の違いで検討するために、対応の無い t 検定を実施した。最後に、図 1 の因果モデルをもとに、高次の LS を独立変数、人生キャリア成熟尺度の各下位尺度を従属変数とし、大学生柔道選手における「性別（男・女）」や「強化経験（有・無）」という個人の属性それ

ぞれ 2 つの母集団を想定した構造方程式モデリング（Structural Equation Modeling：以下「SEM」と略す）による多母集団同時分析を実施した。また、因子モデルや因果モデルにおける適合度の評価には GFI（Goodness of Fit Index）、AGFI（Adjusted GFI）、CFI（Comparative Fit Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）を用いた。GFI、AGFI、CFI はそれぞれ 0 から 1 までの値をとり、1 に近づくほど適合が良いとされる。GFI と CFI は .90 以上がモデルを採択する基準とされ、AGFI が GFI に比べて著しく低下する場合は良いモデルといえない（山本・小野寺，1999）。RMSEA については .08 以下がモデルを採択する基準とされ、0 に近づくほど良いモデルと判断される（豊田，1992）。なお、本研究におけるすべての分析は、IBM SPSS Statistics 23.0 と Amos 24.0 を使用し、有意水準は 5% とした。

III 結 果

1. 個人属性におけるライフスキルの比較

まず、大学生柔道選手における LS の各下位尺度の平均値の差を性別で検討した結果、目標設定 ($t(508) = 3.15, p < .01$) と感謝する心 ($t(508) = 2.25, p < .05$) に有意差が認められ、女子の得点が男子よりも高かった。それ以外の各下位尺度においては有意な差が認められなかった。同様に、強化経験の有無から検討した結果、目標設定 ($t(508) = 2.45, p < .05$) と挽回行動 ($t(508) = 2.51, p < .05$)、考える力 ($t(508) = 3.86, p < .001$) において有意な差が認められ、いずれも強化経験有群の得点が強化経験無群よりも高かった（表 1）。

2. 個人属性におけるキャリア成熟レベルの比較

大学生柔道選手のキャリア成熟のレベルについて、人生キャリア成熟尺度の各下位尺度の性差を検討した結果、いずれの下位尺度においても有意な差が認められなかった。また、強化経験の有無においては、計画性 ($t(508) = 2.49, p < .05$) に有意な差が認められ、強化経験有群の得点が高か

表1 大学生柔道選手の性別および強化経験の有無におけるライフスキルとキャリア成熟度の比較 (n=510)

	男子 (n=408)		女子 (n=102)		t 値 (508)	d	経験有 (n=80)		経験無 (n=430)		t 値 (508)	d
	M	SD	M	SD			M	SD	M	SD		
目標設定	10.11	2.62	11.13	2.88	3.15**	.38	11.00	2.67	10.22	2.57	2.45*	.30
コミュニケーション	12.06	2.36	11.93	2.21	.47	.06	11.96	2.68	11.93	2.20	.10	.01
ストレスマネジメント	11.98	2.76	11.65	3.16	.95	.12	11.85	2.73	11.84	2.75	.03	.00
体調管理	11.04	2.28	10.99	2.39	.17	.02	11.30	2.23	10.89	2.18	1.53	.19
最善の努力	11.78	2.41	11.75	2.27	.10	.01	12.15	2.36	11.82	2.37	1.13	.14
礼儀・マナー	12.75	3.69	13.45	2.06	1.77	.20	12.46	2.34	12.73	2.45	.90	.11
挽回行動	12.17	2.18	12.22	1.84	.23	.02	12.69	1.87	12.06	2.08	2.51*	.31
考える力	11.55	1.99	11.40	1.97	.63	.08	12.50	1.88	11.55	2.06	3.86***	.47
謙虚な心	11.99	2.06	12.08	1.66	.37	.05	12.36	2.08	12.01	1.99	1.45	.17
感謝する心	13.50	2.24	14.07	1.79	2.25*	.47	13.45	2.01	13.40	2.16	.17	.02
キャリア関心性	33.04	5.13	33.11	5.30	.12	.01	33.25	4.95	33.01	5.20	.38	.05
キャリア自律性	34.57	5.37	34.88	5.42	.52	.06	34.65	5.41	34.63	5.38	.03	.00
キャリア計画性	32.46	5.37	32.78	6.22	.52	.06	33.93	5.87	32.27	5.45	2.49*	.30

† 挽回行動は「個人の失敗事態に対する挽回行動」を示す

** *p < .05 **p < .01 ***p < .001

*** t 値の () 内は自由度を示す

**** 効果量 d の基準: d = .20 (効果量小), d = .50 (効果量中), d = .80 (効果量大)

った (表1)。

3. ライフスキルの高次分類

因子分析により大学生柔道選手における高次のLSを検討した結果、主に自らの感情や言動をコントロールし、競技者として適切に振る舞うために必要な「一般的な社会規範スキル(礼儀・マナー、謙虚な心、感謝する心)」(以下「社会規範スキル」と略す)、主に設定した目標を達成しようと自らの体調に気を配ることに加え、粘り強く練習に取り組み続けるために必要な「目標達成スキル(目標設定、最善の努力、体調管理)」、主にチームメイト等の周囲との円滑な人間関係を構築し、そこでの相互作用を通じて自らの悩みも解決していくために必要な「コミュニケーションスキル(コミュニケーション、ストレスマネジメント)」、主に発生した課題や問題に対して、その対応策や解決方法を自ら導き出すために必要な「問題解決スキル(挽回行動、考える力)」の4側面に分類された。これら高次のLSの妥当性を図2に示す高次の因子モデルをもとにSEMにより検証した結果、LSと高次のLS4側面とのパス係数、また高次の

4側面と各々の側面とのパス係数の値は、それぞれ.40以上であった。また、各適合度指標において、RMSEAは.13とモデルの採択基準を若干上回る値であったが、他のGFIは.96、AGFIは.94、CFIは.97と基準を十分に満たす値であった。これらの結果をもとに、モデルの良さを総体的に判断すると、高次の因子分析モデルは概ねデータに適合していると考えられた。

一方、信頼性については、内的一貫性の指標である α 係数をもとに検証を行った。その結果、社会規範スキルは.76、目標達成スキルは.69、コミュニケーションスキルは.74、そして問題解決スキルは.82という値がそれぞれ示され、内的一貫性が概ね確保されていると考えられた。

以上の結果、大学生柔道選手のLSにおける高次の因子分析モデルには、一定の信頼性と妥当性が確保されていることが示されたことから、以後のLSが人生キャリア成熟に及ぼす影響の検討において、これら高次の4側面を分析の対象として用いることとした。

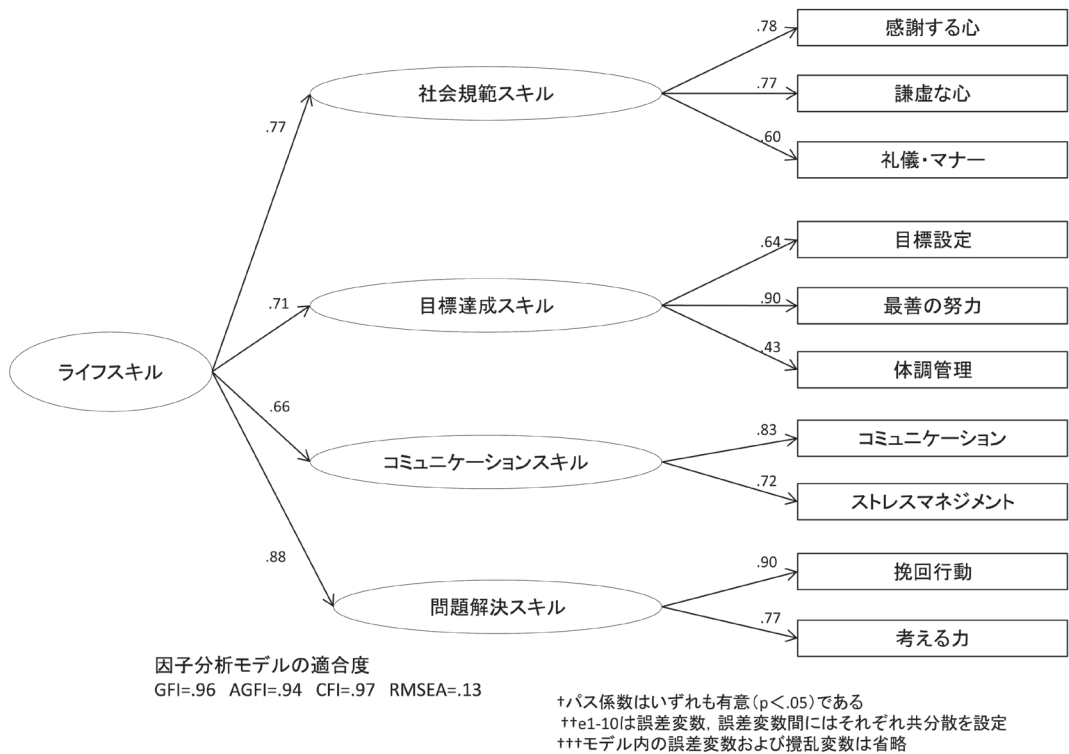


図2 構造方程式モデリングによる高次の因子分析モデルの確認的因子分析、適合度の検証結果 (n=510)

4. 高次ライフスキルの個人属性における比較

因子分析により見出された高次のLSにおける各下位尺度得点の性差を検討した結果、いずれの側面においても有意な差は認められなかった。一方で、強化経験の有無による比較では、目標達成スキル ($t(508) = 2.10, p < .05, d = .26$) と問題解決スキル ($t(508) = 3.25, p < .01, d = .40$) に有意差が認められ、いずれも強化経験有群の得点が高かった (表2)。

5. 高次ライフスキルが人生キャリア成熟に及ぼす影響①—性別による比較—

性別の分析モデルの各適合度指標は、GFIは.99、AGFIは.94、CFIは.99、RMSEAは.04で十分に基準を満たしており (図3)、モデルのデータに対する適合度の高さが認められた。また、影響の説明力を示す決定係数 (R^2) について、関心性においては男子が.26、女子が.24、自律性においては男子が.34、女子が.26、計画性においては男子が.34、女子が.18であることが示された。

モデル内のパスをみると、目標達成スキルは男女共通に人生キャリア成熟の全ての側面に対して有意な正の影響を示していた。しかし、パス係数の値に着目すると女子の値の方が高かった。また、社会規範スキルにおいても、男女共通に自律性への有意な正の影響がみられた。次に性別の違いをみると、男子においては問題解決スキルが人生キャリア成熟の全ての側面に有意な正の影響を与えていたのに対し、女子においてはみられなかった。また、社会規範スキルは、男子において関心性に対する有意な正のパスがみられたが、女子にはみられなかった。

6. 高次ライフスキルが人生キャリア成熟に及ぼす影響②—強化経験の有無による比較—

強化経験の有無による分析モデルの各適合度指標は、GFIは.99、AGFIは.94、CFIは.99、RMSEAは.05で基準を満たす値であることから、モデルのデータに対する適合度の高さが認められた (図4)。また R^2 は、関心性、自律性、計画性

表2 大学生柔道選手の性別および強化経験の有無におけるライフスキルとキャリア成熟度の比較 (n=510)

	男子 (n=408)		女子 (n=102)		t 値 (508)	d	経験有 (n=80)		経験無 (n=430)		t 値 (508)	d
	M	SD	M	SD			M	SD	M	SD		
社会規範スキル	37.94	5.51	38.95	4.90	1.69	.19	38.15	5.27	38.14	5.44	.01	.00
目標達成スキル	33.11	5.65	33.36	5.56	.41	.04	34.38	6.18	32.93	5.50	2.10*	.26
コミュニケーションスキル	23.79	4.44	23.64	4.69	.32	.03	23.72	5.07	23.77	4.38	.10	.01
問題解決スキル	23.87	3.94	23.71	3.10	.40	.04	25.10	3.33	23.61	3.82	3.25**	.40

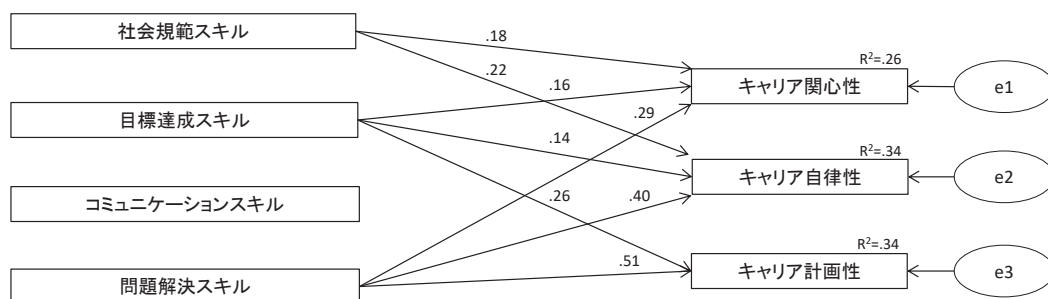
† 社会規範スキルは「一般的な社会規範スキル」を示す

†† *p < .05 **p < .01

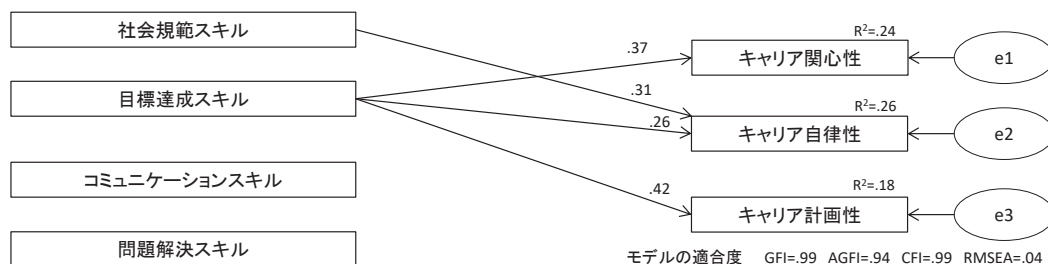
††† t 値の () 内は自由度を示す

†††† 効果量 d の基準: d = .20 (効果量小), d = .50 (効果量中), d = .80 (効果量大)

【男子 (n=408)】



【女子 (n=102)】



モデルの適合度 GFI=.99 AGFI=.94 CFI=.99 RMSEA=.04

† e1, e2, e3は誤差変数, R^2 は決定係数

†† 独立変数間の相関関係と誤差共分散は省略

††† パス係数はいずれも有意(p < .05)である

図3 SEMによる多母集団同時分析の結果(性別)

のそれぞれにおいて経験有群が .26, .34, .34, 経験無群が .24, .26, .18 であった。

次に、強化経験の有無に関わらず、社会規範スキルから自律性と計画性に対して、また目標達成スキルから関心性に対して、それぞれ有意な正の影響が認められた。次に、強化経験の有無による違いをみると、強化合宿を経験した選手では上記の社会規範スキルならびに目標達成スキルからの自律性、計画性、関心性への影響以外は見られなかった。一方、強化経験無群において

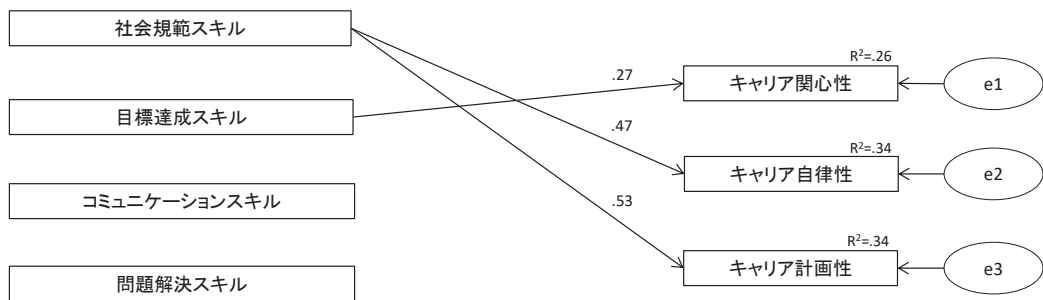
は、上記に加え、社会規範スキルから関心性に、目標達成スキルから自律性と計画性に、そしてコミュニケーションスキルから自律性に対してそれぞれ有意な正の影響がみられた。

IV 考 察

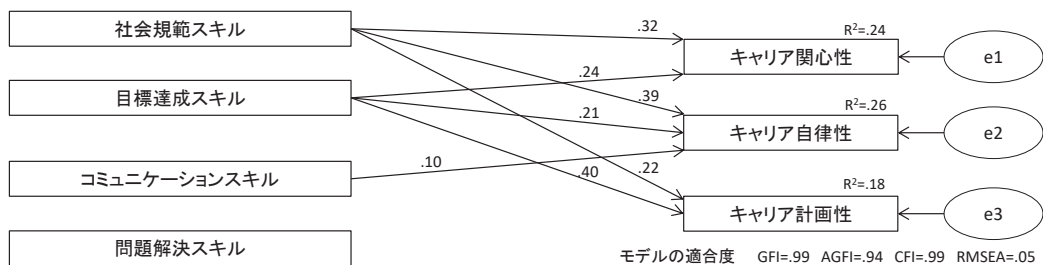
1. 個人属性におけるライフスキルの比較

分析の結果、LSの目標設定と感謝する心において女子の得点が男子よりも有意に高かった。

【強化経験有 (n=80)】



【強化経験無 (n=430)】



モデルの適合度 GFI=.99 AGFI=.94 CFI=.99 RMSEA=.05

† e1, e2, e3は誤差変数, R²は決定係数
 †† 独立変数間の相関関係と誤差共分散は省略
 ††† パス係数はいずれも有意(p<.05)である

図4 SEMによる多母集団同時分析の結果(強化経験)

た。目標設定は「選手が目標の達成に向けて、長期目標や短期目標といった期間等の具体的な目標を設定し、自らのノートやスケジュール帳に書き込むなどして強く意識し続ける」ことを、また感謝する心は「家族や親しい友人等に対して、感謝の気持ちを常に胸に留め、時には素直に表現している」ことをそれぞれ示している。これらは、勝利につながる心がまえとしてアスリートを支える重要な側面である(島本, 2009)とされており、様々な種目に取り組む学生アスリートを対象に行われたLSの獲得状況を検討した結果(島本ほか, 2013)と同様であった。加えて、目標設定については、Duda(1989)やHanrahan and Cerin(2009)が、女子選手は練習やトレーニングによって知識の獲得および技術の向上など、自らの能力を伸ばすことを重視する課題志向性が強いことを報告している。また、課題遂行後における結果の原因を女子は努力に求め、男子は能力に求める傾向がある(Levine and Gillman, 1982)とされている。これらのことから、目標達成への取り組み方を示す

目標設定において、女子選手は自らの能力を伸ばすことを重視し、そのための努力がどの程度結果に関係するかを評価するために、男子よりも明確に目標を設定していると考えられる。また、感謝する心については、女子は自分の行動が周りからの程度受け入れられているかという意識が強い傾向にある(Gentile et al., 2009)とされており、さらに青年期の女子の自己評価に関わる一般的な特徴として、対人的・社会的要因がその視点に大きな位置を占める(柏木, 1983)ことが指摘されている。したがって、本結果には、このような対人関係を重視する女子の心理的特徴が反映されたのではないかと考えられる。

一方、強化経験の有無では、LSの目標設定、挽回行動および考える力の得点が強化経験有群において無群よりも高かった。まず、目標設定に関しては次のように考えられる。強化選手として選抜されるための要件としては、高い競技成績を継続して残すことが挙げられる。したがって、それを可能にするためには計画的で適正な内容の練習

の実施や大会に向けた入念なスケジュールの作成を行わなければならない。本研究における目標設定とは、自らの目標を達成するために具体的な計画を立てることや、段階的な目標を設定できる能力のことを示している。強化経験有群において、この目標設定の得点が高かったことの背景には、高い競技成績を維持することの重要性やそのためのコンディショニングの必要性に対する経験から醸成された強い認識の存在があると考えられる。次に、柔道競技は試合時間が短いため、状況判断を瞬時にを行い、ミス挽回するための行動が求められる。したがって、さまざまな試合展開の中で、迅速な挽回行動は試合の勝敗に少なからず影響を与えることが示唆される。そのため、競技レベルの高い強化経験有群における挽回行動の得点が、強化経験無群よりも高かったと推察される。さらに、考える力は「自らの成功や失敗を分析して課題を見出し、その課題に対する解決への練習方法の工夫等を導き出すことができる」心理特性を示している。上述のように、強化選手選抜の要件には高い競技成績を継続して残す必要があり、試合内容のフィードバックや適正な練習内容の検討は、次回大会における競技成績を残すための要因の1つに挙げられる。また、全日本柔道連盟では近年、中学生年代のトップ選手やその指導者を対象に、自らのパフォーマンスを発揮するための思考力の養成や主体的なアスリートライフスタイルの習慣化を図ることを目的として、強化合宿等の場で研修を行うなどのさまざまな事業に取り組んでいる（岡井ほか、2018）。当該選手にとって、このような事業への参加は多くの経験を積み重ねることができるとともに、パフォーマンスを発揮するための多様な考え方を養成するための機会の1つになるといえる。以上のことを踏まえると、強化合宿等への参加経験のある強化経験有群は競技場面のパフォーマンスに対して、より適切にフィードバックするなどして課題を見出し、その課題解決のための練習内容や方法を導き出すと考えられ、日々のトレーニングに取り組んでいたことが推察される。したがって、強化経験有群の考える力の得点が同無群よりも高く示されたと考えら

れる。

2. 個人属性におけるキャリア成熟レベルの比較

人生キャリア成熟尺度における各下位尺度の性差を検討した結果、有意な差は認められなかった。この理由については、次のように考えられる。古田（2010）は、インターンシップを経験することが新入社員のキャリア形成に関わる「キャリア自信」に正に関連することを報告している。また城（2005）は、就職活動を経験した大学4年生と大学院1年生を対象とする調査結果としてキャリア成熟レベルの有意な性差を指摘しており、男子は女子よりもその程度が高かったことを明らかにしている。これらの結果は、キャリア成熟に影響を及ぼす要因の1つとして、就職活動やインターンシップ等の実社会に関わる経験があげられることを示唆している。このことを考慮した場合、本研究では調査対象者が大学生の中でも比較的低学年であった（平均年齢：男子19.66 ± 1.25歳、女子19.89 ± 1.36歳）と考えられ、このため、調査実施時点での職業決定に関わる実社会とのつながりは弱かったと予想される。したがって、性差が認められなかったことには、以上のような本研究調査対象者の学齡的な特性が関係していると考えられる。

一方、強化経験の有無による比較では、計画性において強化経験有群の方がそうでない群よりも得点が有意に高かった。強化経験有群の選手は、LSの比較において目標設定の高いことが示されている。このことに鑑みれば、日ごろの競技に関わる将来を見据えた計画的な取り組みは、自身の今後の人生や生き方に対する展望にも反映されるのではないかと考えられる。これが、強化経験有群の計画性の高さに表れたのではないかと推察される。

3. 高次ライフスキルの個人属性における比較

性差を検討したところ、各側面において有意な差が認められなかった。これにより、因子分析により見出されたLSの高次の側面においては、男女差がないことが示唆される。また、先述のLS

の10側面における性差を検討した結果では、目標設定と感謝する心において女子の得点が男子よりも有意に高く示されたが、その2側面を包含する目標達成スキルと社会規範スキルには有意差が認められなかった。先述のように、目標達成スキルは設定した目標を達成しようと自らの体調に配慮し辛抱強く練習に取り組むことを、社会規範スキルは自らの感情や言動をコントロールし競技者として適切に振る舞うことをそれぞれ示している。これらのスキルは男女に関わらず、競技に対して真摯に取り組む柔道選手にとって必要なスキルであると考えられることから、LSの高次の側面に有意な性差がみられなかったのではないかと推察される。一方で、強化経験の有無による比較では、目標達成スキルと問題解決スキルにおいて有意差が認められ、いずれも強化経験有群の得点が高かった。目標達成スキルには、自ら設定した目標を達成するために日々の練習・トレーニングを厳しく行い、適切に体調管理を行うことなどが含まれ、また問題解決スキルには、課題や問題への対応策や解決方法を自ら導き出すことなどが含まれている。競技成績がより上位の強化経験有群の得点が高かったことは、両スキルが獲得されていること、さらにそれらが適正に発揮されていることの表れではないかと考えられる。

4. 高次ライフスキルが人生キャリア成熟に及ぼす影響①—性別による比較—

SEMによる分析の結果、男女共通に目標達成スキルが人生キャリア成熟の全ての側面に有意な正の影響を及ぼしていた。このことは、競技に対する取り組み方も関連して獲得したと考えられる目標を達成するためのスキルが、柔道選手としての、また人生を歩む1人の個人としてのキャリアの充実と展望に対して、男女同様に肯定的に作用していることを示す結果として注目できる。また、男子よりも女子においてパスの値が高く示された点については、女子は男子と比較して課題志向性が高い(Duda, 1989; Hanrahan and Cerin, 2009)ことなどが関係し、このような特性がキャリア成熟に影響しているためではないかと考えられる。

次に、男女の違いに着目すると、男子にのみ、問題解決スキルから人生キャリア成熟の全ての側面に対して有意な正の影響が示された。男子は自らの能力に基づいて行動しようとする意識や、競争および社会的承認への意識が強く、他者との比較による優劣や勝敗等の競技成績を重視する傾向がある(Egli et al, 2011)。そのため、男子において柔道選手としての、さらに人生を通じてのキャリアの充実に、自分の能力を認められたいという気持ちや人生において成功したいという意識が関係するのであれば、それをどのように実現させるかということに関係する問題解決スキルと人生キャリア成熟との間に関連がみられることは十分に考えられることである。また、男子においてのみ、自らの気持ちや言動を抑え競技者として適切に振る舞うことを示す社会規範スキルが、今後の人生に対する積極的な興味に関わる関係性に有意な正の影響を及ぼしていた。キャリアにおける自らの能力の承認と成果の獲得に対して強い意識を持つことが考えられる男子においては、社会規範スキルは、例えば問題解決スキルを有効かつ適正に発揮する際の社会的基盤づくりのためのスキルとして重要な意味を持っているのではないだろうか。性別を比較した本分析結果には、このような男子が求めるキャリアの充実に、LSがどのように関係づけられるのかが示されたのではないかと示唆される。

以上の結果から、柔道選手のキャリア成熟レベルを高めるためのLSとしては、男女共通の視点に立てば、目標達成スキルに着目しその獲得を促す教育的支援を行うことが重要と考えられる。一方、明らかになった男女間の違いに基づけば、その教育的支援には、男女それぞれの特徴を適切に踏まえた内容や方法が施されている必要があるといえる。

5. 高次ライフスキルが人生キャリア成熟に及ぼす影響②—強化経験の有無による比較—

SEMによる分析の結果、強化経験の有無に共通して社会規範スキルが自律性および計画性に有意な正の影響を及ぼすことが示され、強化経験有

群のパス値は同無群よりも比較的高かった。柔道は「相手とお互いに組み合って相手の身体を直接的に攻撃する技を活用して勝敗を争うことから、自らを律する心や相手を尊重する態度が求められる」(本村, 2009)とされる。そのため、自らの言動を適切にコントロールし競技者としての適切な振る舞いを求められるスキルの獲得は、他者との関係を充実させると考えられ、それが柔道選手としての、一個人としてのキャリアにおける主体的および計画的な側面に対して競技レベルの高低に関係なく、正に影響していたことが示唆される。また、強化経験有群は全日本強化合宿に参加し、さまざまなタイプの選手との共同生活によって、自らの競技力向上を図るとともに、競技場面以外での競技パフォーマンスを発揮するための生活場面の姿勢や振る舞い方を学ぶことができる。さらに、その強化合宿の共同生活においては、集団を常に意識して行動することが求められ、周りの行動に合わせることなど自らを律することが必要とされる。このことから、強化経験有群はそのような経験を通じて自らの言動を適切にコントロールするスキルを獲得すると考えられ、強化経験無群よりもパス値が比較的高く示されたのではないかと推察される。加えて、柔道選手としてのキャリアを切り開く中心的なスキルである目標達成スキルにおいては、関心性に有意な正の影響を及ぼしていた。これは、先述した男女における分析結果と同様に、強化経験の有無に関わらず当該スキルの獲得が柔道選手としての、そして人生を通じてのキャリアに対する興味や関心の充実に正の影響を及ぼしていると推察される。

次に、強化経験の有無ごとの分析結果について述べると、強化経験有群は無群に比べ、有意な影響が示されなかった点については、強化経験有群の競技へのコミットメントの高さが関係している可能性がある。すなわち、競技レベルが高いと競技へのコミットメントの程度も高い(萩原・磯貝, 2014)とされていることから、強化経験有群は同無群よりも、競技へのコミットメントの程度が高いと考えられる。そして、そのコミットメントの高さは、競技成績に正の影響を及ぼす(島本・

米川, 2014; 清水・島本, 2012)と言われるLSを、この先のキャリアにおける考え方を成熟させるよりも、直近の競技パフォーマンスの発揮に向かわせている可能性がある。そのため、強化経験有群は同無群と比較して、LSの人生キャリア成熟への影響がみられなかったのではないかと推察される。反対に、強化経験無群は有群に比べ、大学卒業を柔道選手としてのキャリアの節目に位置づける選手が比較的多いと予想されるため、柔道選手ではない自らのキャリアについて考える機会も比較的多いと推察されることから、LSのキャリア成熟への影響が多くみられていると考えられる。現に、ストレスマネジメントやコミュニケーションを包含する高次のLSであるコミュニケーションスキルは、自らの悩み等の相談を通じてチームメイト等の周囲との円滑な人間関係を構築する行動特性であり、強化経験無群にのみ自律性に有意な影響を示している。このことから、強化経験無群における指導者やチームメイトとの円滑な人間関係は柔道選手としてのキャリアだけでなく、今後の人生における自律的な考え方を成熟させていると考えられる。

以上のSEMによる強化経験の有無ごとの分析の結果、大学生柔道選手は強化経験の有無に関わらず、自らの感情や言動をコントロールするなどの競技者として適切に振る舞うために必要な社会規範スキルと、目標を達成するための競技に対して真摯に取り組むために必要な目標達成スキルが、柔道選手としての、人生としてのキャリアの充実に正の影響を及ぼすことが示唆される。その中で、先述したt検定結果においては、強化経験有群が同無群よりも目標達成スキルを獲得していることが示された。これは、吉田・徳永(2002)の「競技において好成绩を収めることがLSの獲得に望ましい影響を及ぼす」という知見を支持していると考えられる。また、選手個人のLSの獲得と競技成績の向上が関係していることに加え、今後のキャリアに対する考え方を成熟させることにも好影響を及ぼしていることが示唆される。本結果は、大学柔道選手におけるLS獲得の意義の大きさを示すものとして注目できる。さらに、コ

コミュニケーションスキルや問題解決スキルによる影響が人生キャリア成熟に一部認められたことから、性別や競技レベルの高低などのさまざまな属性をもつ柔道選手に応じた教育支援の必要性が挙げられる。したがって、大学生柔道選手には目標達成スキルを含めたLS全般の獲得を重視した教育支援が、柔道選手としてのキャリア獲得および今後の人生に対する考え方を成熟させるためには重要であると推察される。

また、LSの獲得を促進する教育支援は、大学側が直接関与することはほとんどなく、現場の指導者に一任されていることが多い（津田，2007）ことや、指導者の資質能力の向上が社会的に求められていると考えられ、日々の自己研鑽が求められている（文部科学省，2009）。そのため、現場で主に選手に対するLS獲得に向けた指導を実施する監督やコーチは、その指導内容や方法を理解して指導を実施することによって、指導者にとってもLSの重要性を再認識できる契機となり、指導者自身のLS獲得も促進される可能性がある。また、このことは同時に、選手への適切な指導力を向上させる要因の1つになると推察される。

最後に、これまでの考察を踏まえ、本研究に関する今後の課題を挙げる。まず、本研究ではLSがキャリア獲得を媒介する人生キャリア成熟に及ぼす影響について検討したが、今後は福井ほか（2017）の因果モデルが示すキャリア獲得への影響までを明らかにし、LS獲得の有効性についてのさらなる検証が必要であると考えられる。次に、本研究では一時点での横断調査であったことから、大学4年間にわたる競技生活において、柔道選手のLSの経時的変化について長期的視野をもとに詳細に把握し、その変化に応じたタイムリーな教育支援の方法について検討する必要がある。LSを活用した教育支援については、先述のように、Shimizu et al.（2017）が18歳以下の各年代におけるレスリング選手を対象として実施しているが、今後多様な競技を対象として実施する必要があると考えられている（清水ほか，2010）。そのため、本研究において対象とした柔道選手やその他の様々な競技種目を実施する学生アスリー

トに対して、LSを用いた教育支援について検討していく必要があると考えられる。以上のことによって、学生アスリートに対する教育支援を、競技と教育の両側面から実施することが重要であるといえよう。

V まとめ

本研究では、大学生柔道選手を対象にLS獲得とキャリア成熟について、性別や強化経験の有無から比較・検討し、今後のキャリア教育に関する基礎的知見を抽出することを試みた。まず、大学生柔道選手における個人の属性によって、LS獲得レベルやキャリア成熟レベルの一部に違いがみられることが明らかになった。次に、大学生柔道選手におけるLSを高次の側面に分類するために探索的因子分析を実施したところ、社会規範スキルや目標達成スキル、コミュニケーションスキル、そして問題解決スキルという4側面が抽出された。それら4側面の獲得レベルを性別および強化経験の有無で検討した結果、強化経験有群はそうでない群よりも目標達成スキルと問題解決スキルを獲得していることが示された。さらに、その4側面のLSが人生キャリア成熟に与える影響について、SEMによる多母集団同時分析を個人属性ごとに実施した結果、男女に共通して目標達成スキルが、強化経験の有無に共通して社会規範スキルや目標達成スキルが、それぞれ人生キャリア成熟の複数の側面に有意な正の影響を与えていたことが示された。その中で、性別や強化経験の有無で共通して正の影響が見られた「目標達成スキル」は、目標設定や最善の努力、そして体調管理で構成されており、強化経験有群はそうでない群よりも当該スキルを獲得していることが示され、選手としてのキャリアを切り開く中心的なスキルであると考えられる。特に、目標設定スキルの獲得はLSPの中核的課題である（村上，2010）ことや多様な競技種目において競技成績との正の関連が認められている（島本・米川，2014；清水・島本，2012）。したがって、今後は指導者が大学生柔道選手に対して当該スキルを中心とした教育支援を

実施し、選手の上位競技成績の達成やキャリア成熟のレベルを高めるために、スキルの獲得を促進していく必要があるといえよう。

謝辞

本研究における調査実施に際し、ご協力いただきました各大学柔道部の監督およびコーチ、そして選手の皆様に心より御礼申し上げます。また、本論文の審査におきまして、多くのご助言をいただきました査読者の先生方にも感謝申し上げます。

注

注) 野球選手の賭博行為(毎日新聞, online), 高校運動部活動における暴力事件(日本経済新聞, online1)等, 一部のアスリートや元選手による多数の問題行動が報道されている(参照日 2017 年 9 月 13 日)。

文 献

- 栗野仁雄(2016) 暴力根絶叫ばれる柔道界に波紋。サンデー毎日, 95(28): 30.
- Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D. (1992) A developmental-educational intervention model of sport psychology. *The Sport Psychologist*, 6: 403-415.
- Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D. (1995) Psychological interventions: A life developmental. In: Murphy, S.M.(ed) *Sport psychology interventions*. Human Kinetics, pp.19-38.
- Duda, J. L. (1989) Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11: 318-335.
- Egli, T., Bland, H. W., Melton, B. F., and Czech, D. R. (2011) Influence of age, sex and race on college students' exercise motivation of physical activity. *Journal of American College Health*, 59: 399-406.
- European commission (2012) EU guidelines in dual careers of athletes: Recommended policy actions in support of dual careers in high performance support.
- 福井健人・島本好平・山本浩二(2017) 学生アスリートのライフスキルとライフイベントへの対処との関連—キャリア成熟の媒介効果に着目して—。九州スポーツ心理学研究, 29: 40-41.
- 福井健人・島本好平・山本浩二・垣田恵祐(2016) 学生アスリートのライフスキルと大学卒業後のキャリア形成との関連—教育大学を対象とした検討—。兵庫体育・スポーツ科学, 42: 55.
- 古田克利(2010) インターンシップ経験が新入社員のキャリア適応力に及ぼす影響。インターンシップ研究年報, 13: 1-7.
- Gentile, B., Grabe, S., Dolan-Pascoe, B., Twenge, J. M., Wells, B. E., and Maitino, A. (2009) Gender differences in domain specific self-esteem: A meta-analysis. *Review of General Psychology*, 13: 34-45.
- 萩原悟一・磯貝浩久(2014) 競技スポーツにおけるコミットメントの検討—日本語版スポーツ・コミットメント尺度の作成—。スポーツ心理学研究, 41(2): 131-142.
- Hanrahan, S. and Cerin, E. (2009) Gender, level of participation, and type of sport: Differences in achievement goal orientation and attributional style. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 12: 508-512.
- 長谷部誠(2011) 心を整える—勝利をたぐり寄せるための56の習慣—。幻冬舎。
- 城仁士(2005) 就職活動ストレスと人生キャリア成熟の関係: 納得のいく就職活動のために。日本教育心理学会総会発表論文集, 53: 476.
- 柏木恵子(1983) 子どもの「自己」の発達。東京大学出版会, p.92.
- 川畑徹朗(1997) 21世紀の健康教育とライフスキル教育—ライフスキルの定義と、その教育意義について—。学校保健のひろば, 5: 88-91.
- King, S. (1989) Sex differences in a causal model of career maturity. *Journal of counseling and development*, 68: 208-215.
- Levine, R. and Gillman, M. J. (1982) Individual differences for sex differences in achievement attributions. *Sex role*, 8: 455-466.
- 毎日新聞 (online) 野球賭博。https://mainichi.jp/ch150912726i/%E9%87%8E%E7%90%83%E8%B3%AD%E5%8D%9A (参照日 2017 年 9 月 13 日)。
- 文部科学省(2009) コーチの現状と課題。スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)報告書: 9-13.
- 本村清人(2009) 武道に独自の「礼」その意味と価値とは何か。体育科教育, 57(15): 9.
- 村上貴聡(2010) アスリートに対する目標設定。Sports medicine, 22(1): 36-37.
- 日本経済新聞 (online1) 大阪の市立高男子生徒が自殺部活顧問, 体罰か。https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0801E_Y3A100C1CC0000/ (参照日 2017 年 9 月 13 日)。
- 日本経済新聞 (online2) 不祥事続くスポーツ界 国際的な信頼に傷も。https://www.nikkei.com/article/DGK-KZO99418050Y6A400C1UU8000/ (参照日 2017 年 9 月

- 13 日).
- 日本スポーツ振興センター (2014) 我が国における「デュアルキャリア」施策の推進に向けて. 平成 25 年度文部科学省委託事業「デュアルキャリア」に関する調査研究報告書: 203-211.
- 岡井理香・金野潤・山田利彦・渡辺涼子・中村兼三・井上康生・増地克之・出口達也・田村昌大・石井孝法 (2018) 全国中学校柔道大会トップ選手・指導者に対する目標設定プログラムの有用性—アスリートライフスタイルとデュアルキャリアの考え方に基づいた PDCA サイクルの習慣化を目指して—. 日本コーチング学会第 29 回大会研究発表抄録集: 41.
- 大江篤志 (2003) 成績分析からみた大学教育の研究 (3) 入学類型と全学共通科目の学業成績との関係を中心に. 東北学院大学教育研究所報告集, 3: 1-57.
- 坂柳恒生 (1990) 進路指導におけるキャリア発達の理論. 愛知教育大学研究報告, 39: 141-155.
- 坂柳恒夫 (1999) 成人キャリア成熟尺度 (ACMS) の信頼性と妥当性の検討. 愛知教育大学研究報告, 教育科学, 48: 115-122.
- 島本好平 (2009) アスリートのためのライフスキルプログラム再考. *Sports medicine*, 21(5): 46-47.
- 島本好平・石井源信 (2007) 体育授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. *スポーツ心理学研究*, 34(1): 1-11.
- 島本好平・石井源信 (2010) 運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定. *スポーツ心理学研究*, 37(2): 89-99.
- 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信 (2013) アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発. *スポーツ心理学研究*, 40(1): 13-30.
- 島本好平・米川直樹 (2014) 高校生ゴルフ競技者におけるライフスキルと競技成績との関連. *体育学研究*, 59: 817-827.
- 清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. *日本体育大学紀要*, 41(1): 111-116.
- 清水聖志人・島本好平 (2012) 男子大学生レスリング競技者におけるライフスキルと競技成績との関連. *体育経営管理論集*, 4: 47-53.
- Shimizu, S., Shimamoto, K., Kawano, T., Kukidome, T. and Tsuchiya, H. (2017) Effect of Japanese training camps on life skills acquisition to nurture intelligent wrestlers. *Psychology*, 8: 576-589.
- Shimizu, S., Shimamoto, K. and Tsuchiya, H. (2015) The relationships between life skills and post-graduation employment for top college student wrestlers in Japan. *International Journal of Sport and Health Science*, 13: 17-22.
- 清水聖志人・高橋義雄・河野一郎 (2010) 大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較—レスリング競技者を対象として—. *スポーツ産業学研究*, 20: 119-129.
- 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東健二・稲富勉・斉藤隆 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. *健康科学*, 22: 109-120.
- 友添秀則 (2006) 大学スポーツを取り巻く問題. *現代スポーツ評論*, 14: 11-12.
- 東海林祐子・堀越正範 (2011) 子どもに夢を持つことの大切さを伝えたい—熊谷ライオンズクラブ 45 周年事業にて—. *Sports medicine*, 23(4): 29-33.
- 豊田秀樹 (1992) SAS による共分散構造分析. 東京大学出版会, pp.99-118.
- 豊田則成・中込四郎 (1996) 運動選手の競技引退に関する研究—自我同一性の再体制化をめぐる—. *体育学研究*, 41: 193-206.
- 豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. *体育学研究*, 45: 315-332.
- 津田忠雄 (2007) 大学教育とスポーツ競技を通じての教育—大学生アスリートとライフスキル教育プログラムの展開—. 近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要, 6: 1-13.
- 上野耕平 (2005) ユース選手を対象としたライフスキルプログラム. *体育の科学*, 55(2): 101-105.
- WHO: 川畑徹朗監訳 (1997) WHO ライフスキル教育. 大修館書店, pp.11-30.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (1999) Amos による共分散構造分析と解析事例. ナカニシヤ出版, pp.1-22.
- 山本浩二・垣田恵佑・島本好平・永木耕介 (in press) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得が競技成績に及ぼす影響. *武道学研究*.
- 山本浩二・島本好平・岡田龍司・岡崎祐史・中山忠彦・矢野裕介 (2016) 大学生柔道選手におけるライフスキルとキャリア成熟との関連. *神戸医療福祉大学研究紀要*, 17: 107-115.
- 吉田安宏・徳永幹雄 (2002) 運動・スポーツ経験とライフスキル. 徳永幹雄編, 健康と競技のスポーツ心理. 不昧堂出版, pp.156-166.

(2018 年 5 月 22 日受付)
(2018 年 10 月 9 日受理)